2015 年 1 月　第 13 巻第 1 号

かく語りき－聖人の言葉

「ハートと頭に矛盾が生じた時は、ハートに従え」
（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）

「舞い上がる高さが高いほど、飛べない者の目に映る姿は小さくなる」
（ザラスシュトラ）

今月の目次

・かく語りき－聖人の言葉
・2015 年 4 月の予定
・2014 年 12 月の逗子例会
　「ホーリー・マザーの生涯における興味深いエピソードとその意義」
　スワーミー・メーダサーナンダによる講話
・2014 年 12 月の逗子例会にて
　ホーリー・マザー　シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕 163 周年記念祝賀会を開催
・マハーラージ、2014 年 11 月に韓国ソウルを訪問
・クリスマス礼拝
・元旦のカルパタル
・忘れられない物語
・今月の思想

今月の予定

4 月 4 日（土）14:00～16:00
東京・インド大使館例会
講義：バガヴァッド・ギーター（無料）
場所：インド大使館　：03-3262-2391
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428
＊ID カード（免許証など写真つきの身分証）を必ずお持ちください。

4 月 5 日（日）、12 日（日）、26 日（日）
14:00～15:30
ハタ・ヨーガ・クラス
場所：逗子本部新館（アネックス）
＊19 日（日）はお休みです
＊体験レッスンもできます。
お問い合わせ：080-6702-2308
（羽成淳）

4 月 7 日（火）、21 日（火）
10:00～12:00
火曜勉強会

場所：逗子本部本館
お問い合わせ＆お申込み：
benkyo.nvk@gmail.com
＊毎月第1、第3火曜に開催の予定
＊予定変更もありますので必ずＨＰトップページをご覧ください。

4月10日（金）～12日（日）
サットサンガ in 大分
お問い合わせ：0972-62-2338　じねん
＊詳細は特別プログラムをご覧ください。

4月18日（土）　14:00～16:00
ウパニシャッド スタディークラス
講義：ウパニシャッド（無料）
場所：インド大使館　：03-3262-2391
お問い合わせ：逗子協会 046-873-0428
＊ID カード（免許証など写真つきの身分証）を必ずお持ちください。

4月19日（日）　10:30～16:30
逗子例会
場所：逗子本部本館
午前：講話
午後：朗誦・輪読・講話

4月25日（土）～26日（日）
サットサンガ in 札幌
『バガヴァッド・ギーター』集中講義
お問い合わせ：080-1180-8121 田辺
＊ただ今定員になっておりますがキャンセル待ちをお受けしております。
今後のご案内もできますのでお気軽にお問合せください。
（8月2日にも予定しております）

4月24日（金）
ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動
ただ今、お米、紳士靴下、春物紳士衣料をお受けしております。
その他現地でのお食事配布など。
お問い合わせ：佐藤 090-6544-9304

4月29日（水）　5：00～20：00
アカンダ・ジャパム
場所：逗子本部本館シュライン
その他：食事を提供します。
連絡先：三田村（dd94dd94@nifty.com）まで
4月20日までにご希望の時間帯(1時間単位で何時間でも)をご連絡ください。

ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕 163 周年記念祝賀会
2014年12月21日の逗子例会
「ホーリー・マザーの生涯における興味深いエピソードとその意義」
スワーミー・メーダサーナンダによる講話

シュリー・ラーマクリシュナとホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー（以下、マザー）がダクシネシュワルにいらした時、コルコタの貴婦人らがよくお二人を訪ねてきまし

た。婦人らがホーリー・マザーに対してよく言ったのは、「あなたのご主人は、床を共にしないという点を除いては、すべてが非凡で、素晴らしい方ですね」でした。結婚において当然であることが行われていないというのが、シュリー・ラーマクリシュナについての唯一の不満でした。ブラーフモー・サマージの信者の多くも、「シュリー・ラーマクリシュナは自分の妻から家住者としての生活や家族、子供を奪っている」と言って批判していました。しかし、本当にそうだったのでしょうか。

恵まれない主婦？

シュリー・ラーマクリシュナはマザーに、ダクシネシュワルに来て自分の世話をしてほしいと頼まれました。マザーがダクシネシュワルに到着されるとすぐ、シュリー・ラーマクリシュナは非常に重要な質問をされました。それまでは完全に霊的生活を送っていられたのに結婚されたので、妻が自分に「世俗の生活に引きずり込む」ために来たのか尋ねられたのです。妻は夫に対してそうする権利があるわけですから、マザーが自分に夫として世俗的な生活を送ることを望んでいるだろうかと考えられ、もしそれがマザーの望まれることであればそのような生き方をしようと決心されていたのです。このことから、シュリー・ラーマクリシュナがマザーに対しどれ程の自由を与えたようとされていたかが分かります。マザー自身が普通の夫婦関係を望んでいるなら、禁欲的な生き方を強制しようとは全く考えていらっしゃらなかったのです。「夫は神のことだけを話し、神のことだけを考え、寺院には通っても自分のことなど顧みない」とマザーが思っていらっしゃるのではないか、と心配されたのです。

マザーのお答えは非常に意義のあるものでした。シュリー・ラーマクリシュナに家住者の生活を送ってほしいかと聞かれて、マザーは、「いいえ、私はあなたが霊的な道を進まれるお手伝いをしに来たのです」と答えられました。このような答えはめったにありません。この答えからも、強制されたのでも最後通牒を突きつけられたのでもなく、妻は自らの意思で同意したのだというのがはっきりと分かります。そして、ここがマザーの非凡な点であることも明らかです。この答えは夫を喜ばせるためではなく、心から思っていらっしゃったことであり、自分が仰ったことにこの時から従われたのです。シュリー・ラーマクリシュナの霊的実践に一

切反対しないどころか、自らの意思で霊的生活の伴侶となったのです。

シュリー・ラーマクリシュナは、マザーを母神と見なして正式な礼拝を行われたことがあります。今朝、朝食時に、ドゥルガー・プージャで女の子が礼拝の対象に選ばれるのはなぜかという質問がありました。これは、ドゥルガー母神の像が作られると、その像の中に母神の霊が入っているのだと想像するわけですが、生きている子供が礼拝されるのであれば、人形の場合とは違って、意識のある霊がその中にいるのだと想像する必要がないからです。シュリー・ラーマクリシュナはこのような礼拝を、アヌマーナ・チャイタンニャ（Anumāna Chaitanya）とプラティヤクシャ・チャイタンニャ（Pratyaksha Chaitanya）という２つの呼び方で表していらっしゃいました。神像は木や粘土、写真などですからそこに霊が宿っているのだという想像（anumāna）が必要ですが、生きている人間を礼拝するのであればそこに霊がいるの（pratyaksha）ですから想像する必要はありません。このような理由から、シュリー・ラーマクリシュナはマザーを母神として礼拝されたのです。さらにそれだけではなく、ご自身の霊的実践や霊的経験の成果をマザーの御足に捧げられたのです。このような礼拝に対し、マザーは自然に反応されて礼拝を受け入れられました。この点にもマザーの偉大さが現れています。

ブラーフモー・サマージは、シュリー・ラーマクリシュナが妻から普通の家庭生活を奪っていると言いましたが、本当に奪っているのであれば、奪われた者は悲しみにくれるでしょう。マザーがそのような悲しみや後悔をお見せになったでしょうか。そのようなことは全くありません。それどころかマザーは、シュリー・ラーマクリシュナと共にダクシネシュワルで生活していた時、「私のハートは至福に満ちていました」と述べられています。何かを奪われたという感情などではなく、喜びと至福に満たされていたのです。

倫理観か憐れみか

また、次のような出来事もありました。ある低いカーストの女性が夫を捨てて別の男性の愛人として暮らしていました。当然、この女性に対する人々の風当たりは強く、女性は軽蔑されました。インド社会では、このような女性は蔑みを受けます。数年後、一緒に暮らし

ていた男性が女性と別れたいと言い始めました。すると女性はマザーの所に泣きながらやって来て、自分は今の男性のために夫を捨てたのに、この男性に捨てられそうであると打ち明けました。大半の人は話を聞き入れないでこの女性を無視するでしょう。しかしマザーは違いました。

マザーは社会の倫理的通念を全く無視され、この女性の窮状を憐れんで件の男性を呼ばれると、自分のために夫を捨てて自分に何年も仕えてくれた女性を捨てるとは不信心であると諭されました。男性はマザーの言い分はもっともだと思い、思い直して女性とやり直すことにしました。この例では、人を憐れみ、共感する気持ちが倫理観よりも大きいのが分かります。マザーの憐れみや思いやりはこれ程までに深かったのです。

泥棒の供物

また、次のような出来事もありました。マザーの故郷であるジャイランバーティの先に、盗みを生業とするイスラム教徒らが住む村がありました。彼らが泥棒であることは地元の人々に知られていましたが、彼らがジャイランバーティのマザーを訪ねてくると、マザーは彼らを受け入れられご自分の子供のように接されました。普通の人だったら、このような人に対し偏見を持たずに親切に受け入れることができるでしょうか。彼らの一人がシュリー・ラーマクリシュナに捧げる果物を持ってやって来て、自分の供物を受け取ってくださいますかかとマザーに尋ねた時、こう答えられました。「もちろん、いただきます。あなたは愛と敬意を示してくれているのですから。もちろん受け取りますよ」

これを見ていたマザーの親類の一人が、なぜあんな人から供物を受け取るのかと尋ねました。「彼は泥棒なんですよ」という彼女の言葉に、マザーは真剣になってお叱りになりました。「言葉を慎みなさい。誰が善人で誰が悪人か、私には分かっています」これは、外面的には泥棒である人でも内面的には全く違う人間であるかもしれないということです。周囲の環境のせいで彼は泥棒にならざるをえなかったけれど、内面的には高貴な気質を持っていたかもしれないのです。この例でも、マザーが職業ではなく、供物を持ってきた気持ちや態度を見ていらしたことが分かります。

『マハーバーラタ』の中に、シュリー・クリシュナがドゥルヨーダナ王に宮殿に招かれる話があります。シュリー・クリシュナは、貧しいが偉大な信者であるヴィドゥラからも同時に招待を受けていました。シュリー・クリシュナはどちらの招待に応じたでしょう

か。普通の人であれば王様からの招待に応じるのは明らかですが、シュリー・クリシュナはヴィドゥラの招待に応じたのです。この理由は、ヴィドゥラの招待には愛と敬意、謙虚さがあったのですが、ドゥルヨーダナの招待は虚栄心とエゴが露わだったからです。マザーが泥棒の男からシュリー・ラーマクリシュナへの供物を受け取られた理由も同じです。そこに、愛と敬意があることをマザーは見て取られたのです。

母親たる振る舞いはマザーが決める

ダクシネシュワルでマザーがシュリー・ラーマクリシュナと暮らされていた時、シュリー・ラーマクリシュナの食事を用意して食事を運ぶのは大体マザーがやっていらっしゃいました。ある日、女性がやって来てマザーに声を掛け、タクール（シュリー・ラーマクリシュナ）に食事を運ばせてほしいとお願いしました。マザーは承諾されましたが、この女性はあまり善良な性格ではありませんでした。皆さんご存知の通り、シュリー・ラーマクリシュナはそのような人が触れた食べ物を召し上がることができなかったので、その食事を召し上がろうとはされませんでした。そして「なぜあのような女性に食事を運ばせたのか」とマザーを問いただされたのです。「あの女性の性格が分からなかったのか」と尋ねられ、さらに、マザー以外の人間には自分に食事を運ばせではいけないと仰いました。

この小さな出来事には重要な点が 3 つあります。1 つ目は、マザーは従順で誠実な妻で、シュリー・ラーマクリシュナに言われたことは何にでも文字通り 100%完全に従われましたが、時には例外もあり、自分の意見を差し控えずに独自の意見を言われることもあったということです。この時がまさにそうでした。

2 つ目に、マザーは、誰かが自分のところにやって来て「お母さん」と呼びかけて何かを頼んできたらそれを断るわけにはいかない、とシュリー・ラーマクリシュナに仰ったことです。つまり、母親として振る舞うべき時には、誰にも譲らず、自分の考えと判断に従って行動したということです。

3 つ目に、シュリー・ラーマクリシュナが自分の食事の支度はマザーだけがするようにと言ったのに対し、「あなたは私だけのタクール（師）ではなく、皆のタクールなのです」と言い返されたことです。シュリー・ラーマクリシュナは皆の主であるから、他の人が主にお仕えしたいと言ったら、「なぜ彼らがお仕えすることが許されないのですか、なぜ私だけが許されるのですか」、つまり、独占すべきではない、ということです。マザーはシュリー・ラーマ

クリシュナを独占したくなかったのです。これを聞くとシュリー・ラーマクリシュナは反論されず、食事を食べ始められました。

外国人信者と共に

シスター・ニヴェディターは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）の熱心な信者でアイルランド人でした。外国から来てコルカタの人々に仕えたマザー・テレサは世界的に有名ですが、シスター・ニヴェディターのことや、彼女がインドに奉仕するために自分の人生をどれ程なげうったか、インドの地位向上にどれ程大きな影響を与えたか、知っている人はほとんどいません。彼女は偉大な思想家、著述家、演説家で、精力的に活動をしたのですが、彼女はほとんど知られていません。マザーがコルコタのウドボーダン・ハウスにいる時に、シスター・ニヴェディターはよくマザーを訪ねてきました。彼女はその時の様子を次のように語っています。「そこでは女性信者らが一緒に座っていました。師の妻であるマザーは特別な人なのだ、という雰囲気や認識は、彼女らの中に全くないようでした。またマザーも、自分は師の妻なのだと自分の権利を主張することは全くされませんでした」マザーを知らない人は、ウドボータンに来ると最初はマザーのことを師の一信者だと思ったのです。このような振る舞いは、エゴが全くない人間にしかできないだけでなく、先ほどお話ししたように、「師はみんなのものだ」というマザーの発言にも一致します。

英国人がインドを支配していた時、英国の支配者らとインド人らは互いに憎み合っていました。日本の歴史を見ても、外国人に対して同様の恐怖や嫌悪感を抱いていた時期がありますね。インドでは昔、侵略者であるイスラム教徒やヨーロッパ人と一緒に食事するとカーストを失いました。カースト制に基づくインド人社会では、カーストを失うということは社会から追放されることになります。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、西洋の宗教は非常に狭く社会は非常に広いが、インドの宗教は非常に広く社会は非常に狭いと言ったのは、このような点があるからです。

上位カーストのヒンドゥー教徒の未亡人は、カーストの決まりでやってはいけないことがいろいろとあり、例えば、これにもあれにも触れないようにと気を遣っていました。マザーはブラーミンという上位のカースト出身でシュリー・ラーマクリシュナと結婚して未亡人になったため、非常に高いカーストの未亡人ということになりましたから、飲食物について一層厳しい決まりに従う必要がありました。スワーミージーの西洋の弟子らがインドに到着

し始めると、スワーミージーは、マザーが彼らをどのように受け入れるかと非常に心配されていました。しかし、マザーの考え方は普通の考え方のはるかに先を行っており、愛をもって外国人信者を受け入れられただけでなく、ためらうことなく外国人信者と食事を共にされました。

シスター・ニヴェディターはスワーミージーに、「マザーが深い愛で自分を受け入れてくださっただけでなく、一緒に食事をしてくださった」と報告し、これを聞いたスワーミージーはホッとされました。スワーミージーの二人の弟子、シスター・ニヴェディターとアメリカ出身のシスター・クリスティーンは、教育を通してコルコタの女性の地位向上に努めました。二人は近くに住むマザーの元をよく訪ねました。ある時マザーは西洋の結婚について質問をされ、西洋での結婚式のやり方を見せてほしいと頼まれました。二人が夫と妻を演じて誓いの言葉を述べると、誓いの最後の句である「死が二人を分かつまで」という部分をマザーは大変気に入られました。死が分かつまで共にいる、という考えに「なんて高貴な誓いなんでしょう」と興奮した様子でおっしゃり、誓いの言葉を何度もくり返されました。

当時、多くのインド人が、イギリス人をインドから追い出すために戦っていました。この自由のための戦いの一環として、インド人は英国製の機械織りの布の使用を拒否しました。ホーリー・マザーの信者の中にもこれに同調する人々がいましたが、このような状況でもマザーは、「あの人たち（イギリス人）も私の子供です」とおっしゃっていました。ここにも、自分の属する社会や国を超えてあらゆる人の母であろうとする姿勢が窺えます。しかも、田舎の村に生まれ、上位のカーストの未亡人であった方がこのような考え方でいらっしゃったのです。

マザーの生涯が手本

万人の母であり、思いやりと憐れみにあふれ、夫に従順であろうとしながらも、母としてどうすべきかについては自身の考えに基づいて判断する権利を持っていたーこれらはすべて、マザーの特徴です。さらに、鋭い観察力もお持ちでした。

第１次世界大戦の終わりに、米国大統領ウッドロウ・ウィルソンは、「十四か条の平和原則」の中で世界平和を打ち立てるために国際連盟の設立を図りました。マザーの弟子の一人が調子よくマザーに言いました。「マザー、国際連盟ができたので、これからは世界が平和になり国同士の戦争はもう無くなりますよ」するとマザーはおっしゃいました。「息子よ、彼らの言っていること

は口先だけで、心の底から言っているのではありません」その後間もなく第2次世界大戦が起きたことを考えれば、マザーのおっしゃったことは正しかったことが分かります。

マザーの並外れた素晴らしさを物語る例は、この他にもたくさんあります。単なる宗教指導者ではなく、19 世紀のインドの偉大な預言者、偉大な聖者の妻であるだけでなく、ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーは自身が偉大な霊的指導者だったのです。私たちはマザーについて研究する必要があるでしょう。特に女性は、マザーの特質から大いに学ぶことがあります。シュリー・ラーマクリシュナは霊的な教えや助言を数多くなさり、スワーミージーもインスピレーションに満ちた講話をたくさんされました。マザーは人前で決して話されませんでしたが、マザーの生涯そのものがメッセージなのです。

肯定的な我慢

私は、ベルルで大学の運営に携わっていた時、生徒や父兄などが関わる様々な個人的問題にはほとんど関係がありませんでした。しかし、日本に来てからは打って変わって、協会の信者さんたちが生活の中で抱える大きな問題や心配事についていくつか相談を受けます。インドにいた時は、離婚など人間関係に関する問題に対処したことはありませんでした。私の観察したところでは、夫婦関係だけでなく、親類や友人、同僚との関係や近所づきあいなどの人間関係を続けるにあたり、一般的に最も大きな問題は、我慢が足りないことのようです。さらに言えば、お母さんや奥さんが我慢をすることが必要であり、それによって結果がよくなることが多いようです。

この点が、マザーの最も強いメッセージでもあります。住まいは常に小さく慎ましかったものの、マザーの周囲にはいつも厄介な親類がいました。精神に異常を来した親類、自分のことしか考えない親類、喧嘩ばかりしている親類などでしたが、それでもマザーは常に我慢していました。歯を食いしばって何とかこれに耐えよう、という否定的な我慢ではなく、愛のこもった、包容力のある、肯定的な我慢です。愛なしに、このような我慢をすることは可能でしょうか。愛のない我慢は不幸で否定的になり、ある時限界に達するかもしれません。私にとっては、これがマザーの最も重要なメッセージです。

ある男が助言を求めて禅師の許を訪ねました。禅師がどうしたのかと尋ねると、男は説明しました。「私の家は一部屋だけの小さい家です。私には家族がいますが、妹の家族が同居せねばならなくなり、今この部屋に住んでいる

者が 3 人から 6 人に増えました。今度は弟の家族も事情があってうちで暮らすことになり、狭い部屋に 9 人が生活しています。地獄のようです。どうすればよいのか助言をいただきたいのです」禅師は、自分の言うことに一字一句従うのなら助言をしてやろう、と答えました。どんなに難しくても必ず従います、と男が約束すると、禅師は、お前はウシとヤギを飼っているね、と言いました。男は、はい、近くの小屋に家畜が何頭かいます、と答えました。禅師は、家畜も自宅の中に連れてくるように、と言いました。男は、言われた通りにしますと約束し、それからの 2 週間、すでに満員となっていた部屋に人間と動物が一緒に暮らしました。部屋は汚れと悪臭、騒音でいっぱいになり、家庭生活は完全に混乱しました。そこで男は泣きながら禅師の許に行き、このような状態になって初めて地獄とはどういうものか分かりました、もう気が狂いそうです、と訴えました。禅師は男に、動物を小屋に戻して 1 週間後にまた来なさい、と言いました。1 週間が過ぎて男がやって来ると、禅師はその後どうかと尋ねました。男は笑顔で答えました。「9 人で同じ所に住んでいますが、とても快適です」

皆さんも、様々な困難に見舞われたら、マザーが立ち向かった問題と比べてみてください。きっと自分の問題が小さく思えるでしょう！

2014 年 12 月の逗子例会
ホーリー・マザー　シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕祝賀会を開催

2014 年 12 月 21 日（日）、逗子本部別館（アネックス）で行われた 12 月の逗子例会にて、ホーリー・マザー　シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕 163 周年記念祝賀会を執り行いました。

午前 6 時、本館の礼拝室でマンガラ・アラーティを行いました。祝賀会の準備のために前夜から本館と近くのホーリー・マザー・ハウスに宿泊されたボランティアの方々と、協会の常駐スタッフが参加しました。

朝食後、ボランティアにより、本館では昼食のプラサードの準備が進められ、アネックスでは祭壇やプージャー（礼拝）用の台が設置され、供物、花、プージャーの道具、プシュパンジャリ（花の奉献）用の花をのせた盆が準備されました。また、アネックスにはイスが並べられ、音響機器も設置されました。

祭壇の準備の最後に、マハーラージが供物の並び具合を確認し、マザーとシュリー・ラーマクリシュナ、スワーミージーの御写真に白檀のペーストを付けました。そして祭壇にひれ伏して挨拶しました。午前 11 時過ぎ、ほら貝の音と共にプージャーが始まりました。

マハーラージは台上で介添えなしに一人でプージャーを行い、続いてのアラーティでは、ほら貝や鐘、シンバルが鳴り響く中、地球の五大構成要素を象徴するものを捧げました。そして、参加者全員で「カーンダナ・バーヴァ・バンダナ（Khandana Bhava Bandhana)」を歌い、次にマハーラージのハルモニウムの伴奏で「サルヴァマンガラ・マンガーリェ（Sarvamangala Mangalye)」を斉唱しました。

12 時 50 分頃からプシュパンジャリを行いました。参加者全員に花が配られると、マザーに捧げるプシュパンジャリのマントラをマハーラージと共に詠唱しました。そして一人一人花を捧げました。その後本館に移動して昼食のプラサードをいただきました。

午後 2 時 30 分頃から再びアネックスで午後の部が行われ、『ホーリー・マザーの福音』の「ジャイラームヴァーティ 1913 年 3 月 14 日」を輪読した後、「ホーリー・マザーの生涯における興味深いエピソードとその意義」をテーマにマハーラージが英語で講話を行いました。（講話は本号に掲載。）通訳は横田さつきさんでした。

続いて、信者さん 3 名のリードで、泉田香穂里（シャンティ）さん作の日本語賛歌「私のお母さん」と「長い間」を斉唱しました。次に、部屋を暗くして瞑想を行い、ヴェーダの結びのマントラを詠唱しました。最後に、本館に戻って茶菓をいただきました。

マハーラージ、2014 年 11 月に韓国ソウルを訪問

（Trishul さん-Seoul National University-寄稿）

2014年11月7日(金)～11日(火)、マハーラージはソウルを来訪されました。この15年間、マハーラージは継続して韓国を訪問されており、今回の訪問は、2013年にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕150周年記念祝賀行事の一環としてソウルで開催された祝賀会に出席されて以来の来韓でした。

9日(日)午前、マハーラージはJ-Yoga Studioで講話を行われました。通訳はJina Leeさんでした。テーマはヴェーダーンタ哲学で、この講話に約30名が参加しました。講話の前にはマントラを詠唱し、講話の後は誘導瞑想、質疑応答を行いました。

10日(月)は、Seoul National University(ソウル大学校)にて「ヴェーダーンタ：インドの叡智の花」というテーマで講話を行われました。開始のあいさつはTravis L. Smith教授、通訳はJina Leeさんでした。参加者は10～12名だけでしたが、講話は好評で、質疑応答では活発に意見が交わされました。

大学で開催され主な参加者も学生であることから、マハーラージは授業形式で講話を行われ、レクチャーホールのホワイトボードを使って講話の要点を書き出されました。講話の後、学生や教授らと共に同大学を短時間見学されました。

日曜に引き続き、創立間もないVedanta Society of Korea(韓国ヴェーダーンタ協会、以下「韓国協会」)についてのミーティングが行われ、韓国協会のしっかりとした地盤を築くための今後の計画が討議されました。

Abhijit Ghoshさん、Viveka Kimさん、Jina Leeさん、Travis Smith教授が年間プログラムの運営を行い、マハーラージの次回の来韓の調整をサポートすることが決定しました。これにより、韓国協会は会員の登録を正式に行うこととし、2015年3月から毎月『バガヴァッド・ギーター』のクラスを開催することになりました。マハーラージの次回の来訪は今のところ6月に予定されており、来訪時にはリトリートを開催されるお考えのようです。今後は年に2回訪韓されたいとのことで、春にリトリートを、秋に公開行事を開催されたいそうです。

マハーラージは2014年11月11日に日本への帰途に就かれました。今回のご訪問で韓国のヴェーダーンタ・グループは改めて活気づき、マハーラージの次回のご来訪を心待ちにしています。

クリスマス礼拝

2014年12月24日(水)、午後7時から毎年恒例のクリスマス・イブ礼拝が逗子本部本館で行われました。クリス

マス・イブは日本では祝日ではなく平日にあたることが多いので、仕事の後に遠方からの参加者が来やすいように、開始時間を遅くしプログラム全体の時間も短く設定されています。

今年は、本館入口のドアの上に「メリー・クリスマス」の文字が飾られました。2 階の礼拝室には特別な祭壇が設置され、瞑想するイエス・キリストの絵が最上段に、『ラーマクリシュナの福音』に出てくる聖母子像の絵の複製が 2 段目に置かれ、ケーキや様々な菓子、花などの供物で美しく飾られました。

キャンドルに灯りが点され、マハーラージが礼拝を執り行いました。礼拝の最後にマハーラージは、全世界のヴェーダーンタ協会でクリスマスを祝う伝統があることを簡単に説明しました。続いて、泉田香穂里（シャンティ）さんの伴奏に合わせて皆でクリスマス・キャロルを歌いました。そして、『新約聖書』の「マタイによる福音書」を日本と英語で輪読しました。

協会では、クリスマス礼拝にキリスト教の聖職者にスピーチしていただきたいとずっと考えていましたが、クリスマス・イブはキリスト教関係者にとって非常に忙しい時期ですので、これまで実現が難しかったのですが、今年は、カトリック教徒の留学生で現在上智大学大学院で心理学を勉強されているレオナルド・アルバレス（Leonardo Alvarez）さんに「イエス・キリストの愛と慈悲のメッセージ（Jesus Christ’s Message of Love and Compassion)」をテーマに日本語でお話しいただきました。具体例に富む、興味深いお話でした。

講話の後、「きよしこの夜」を斉唱し、1 階に下りて皆で夕食のプラサードをいただきました。参加者は、これまでのクリスマス・イブの礼拝で最も多い

約 45 名でした。

元旦のカルパタル

1 月 1 日（木）、午前 11 時 30 分から、逗子本館にて毎年恒例の元旦のカルパタルを行いました。初めに、マハーラージのリードでヴェーダの平和のマントラを皆で詠唱し、次に、『ホーリー・マザーの福音』、『ラーマクリシュナの福音』、仏陀の教え、聖書、コーランを英語と日本語で輪読しました。続いてマハーラージが新年の挨拶を述べ、正月の意味、内省の大切さ、よく生きるためのヒントなどについてお話ししました。

その後昼食のプラサードを皆でいただき、午後 2 時過ぎに協会を出て、雪の降る中を徒歩で鎌倉に向かいました。初めに高徳院を参拝して大仏に供物を献上し、回廊の内壁で休憩して皆で茶菓をいただきました。続いてバスに乗って鎌倉駅に行き、駅の近くにあるカトリック雪ノ下教会を参拝しました。教会の大聖堂前の階段では、約 400 基近いろうそくが並べられて「鎌倉キリスト教万灯祈願」が行われており、その場に居合わせた司祭とお話しする機会を得ました。司祭は、神学の勉強のためにインドのプネーに留学されたことがありヴェーダーンタ哲学にも興味を持たれているそうで、マハーラージや皆と楽しそうに会話を交わされました。

その後、再び徒歩で鶴岡八幡宮に向かいました。通常、元旦の八幡宮は長蛇の列で、本宮に参拝するには数十分並ばないといけないのですが、この日は雪と寒さのせいか列がなく、待たずに参拝することができました。参拝後、境内で解散しました。

今年のカルパタルは、参加者 20 名程と珍しく少人数でしたが、充実した元旦を過ごすことができました。

忘れられない物語

スーフィズム：3 つの質問の物語

人が望むものはすべて持っているのに、人生の目的が分からないスルタンがいました。スルタンには次の 3 つの質問の答えが分からず、人生について悩んでいたのです。

1. 自分は何をすればよいのだろうか。
2. 神に与えられた仕事を、どのような人たちと一緒にすればいいのだろうか。
3. いつすればいいのだろうか。

スルタンはありとあらゆる賢者に助言を求めました。そして、遠くに住むチシュティー教団の修行僧なら納得のいく答えをくれるかもしれないと言われました。サルタンはすぐに旅立ち、数週間かけて旅をした後、修行僧に会いました。修行僧は自分の土地を耕していました。無学な男でしたが、ペルシャ語の四行詩をくり返し唱えており、決して無知ではありませんでした。

Kaarist waraai ‘elm raw aanraa baash
Dar bande gohar mabaash raw kaan raa baash
Del hast maqaame gaah begozaar o biaa
Jaan manzele aakherast raw jaan raa baash.

知識を超えた働きがあることを知れ。さあ、行け！
宝石のために働くな、鉱床になれ。さあ、行け！
ハートは一時の住まい。さあ、そこから出でよ！
魂が最後の住まいであることを知れ。さあ、行け！

スルタンはペルシャ語の詩には興味がなく、修行僧に 3 つの質問をしまし

た。修行僧は答えず、黙々と仕事を続けました。スルタンは腹を立てて言いました。「私のことを知らないのか。スルタンの中のスルタンだぞ」しかし、この言葉にも少しも驚かず、修行僧は自分のしていることをやり続けるだけでした。

突然、ひどいケガをした男が現れ、修行僧の足下に倒れました。修行僧はスルタンに言いました。「この男を私の家に運ぶのを手伝ってください！」

「手伝うとも」スルタンは言いました。「だが、後で私の質問に答えるかね」

「そんなことは後だ」と修行僧は言いました。2 人はケガをした男を修行僧の小屋に運んで手当てをしました。

「さあ、質問の答えを聞こうじゃないか」とスルタンは言いました。

修行僧は答えました。「宮殿に帰られなさい。もう質問には答えました。何をすればいいのかは、自分の道を進む間に自分の目の前に出てくることをやればいいのです。誰と一緒にすればいいのかは、そこにいる人と一緒にすればいいのです。いつすればいいのかは、起こった時にすればいいのです」
（スーフィー教のチシュティー教団）

今月の思想

「人間は、現在の自分であることを拒む唯一の生き物である」
（アルベール・カミュ）

発行：日本ヴェーダーンタ協会
249-0001　神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel: 046-873-0428
Fax: 046-873-0592
Website: http://www.vedanta.jp
Email: info@vedanta.jp